ために文字があまりに小さくなり、いくつかの資料では利用者がそのままで讀むに堪えないものになっていることも、本書の大きな問題である。これは、共同編纂者二人の協約では、『燕行錄全集』と同じ體裁で、東國大學校出版部から出版される豫定であったものが、非賣品として廉價で出版せざるを得なくなったためである。また、『玉河日記』など京都大學文學部圖書館藏あるいは同附屬圖書館藏のいくつかの資料が、實に不鮮明に仕上がっているのも、大きな問題である。これは本書が見開き上下二段組みになってしまったことに加え、寫眞撮影を依頼した業者の技術に問題があったからである。しかしまた、本書に收錄した諸資料の寫眞本をわずか數ヶ月の期限内にそろえて韓國の林基中氏の手元に送らねばならず、再度の撮影が困難であったこと、さらに惡い條件として原書の虫食いがひどく、業者による寫眞撮影には編纂者が立ち會うことが不可缺であったため、夫馬がこの勞苦を再びすることを恐れたためでもある。貴重な資料をこのようなかたちで影印せざるを得なかったことに對し、利用者として殘念であるとともに編纂者としても慚愧に堪えない。

以上、問題は様々あるが、『燕行錄全集』『燕行錄全集日本所藏編』の二書が、東アジア史の研究に大きく寄與することは、疑いのないところである。

なお本書は、編纂計畫が始まった當初に林基中氏の方から示された協約により、夫馬進・林基中編で出版される豫定であったが、林基中氏の一方的な都合によって共編者に事前の連絡もなく林基中・夫馬進編で出版された。これについては修正を要求したが、結局聽き入れられなかった。本書序文およびこの紹介を讀む利用者は、あるいは不可解なものを覺えると考えるのでここに記す。また本書三冊とも「目次」と「凡例」の部分の四枚のみ、切り取られ新しいものと張り替えられている。これにも利用者は不可解なものを覺えるであろうが、これが何を意味するのかは、ここでは記さない。まことに「世には思わぬことが起こるものである。」

なお筆者は、撰者と燕行年代とを確定あるいは推定した根據を示すとともに、できるだけ多くの研究者に本書を利用していただきたいと思い、撰者の略歷や簡單な內容紹介をも兼ねた「日本現存朝鮮燕行錄解題」を『京都大學文學部研究紀要』第四十二號（二〇〇三年、豫定）に掲載すべく準備している。燕行錄および燕行使に關心を寄せる諸士が、これをも參照されることを強く望む。資料調査になお不備な點があることを強く恐れる。また本紹介および豫定している「日本現存朝鮮燕行錄解題」に誤りがあるならば、林基中氏を含めた諸士の忌憚ないご批判を心より願う。

二〇〇一年十一月　ソウル、東國大學校韓國文學研究所

B四判　六四三・五七五・六四二頁非賣品

Dauril Alden *Charles R.Boxer: An Uncommon Life*

中砂明德

ヨーロッパの對外發展史の權威チャールズ・ラルフ・ボクサー氏は二〇〇〇年四月に九十六歲で亡くなった。日本とも緣の深い彼の人となり・業績については、幸田成

友（「シー・アール・ボックサー氏に再會す」一九四六、『幸田成友著作集』第七卷に收錄。その他にも數編あり）・榎一雄（「ボクサー教授の業績」、『東方學』六〇、一九八〇。「ボクサー教授著作目錄」同上七〇、一九八五。いずれも『榎一雄著作集』第十一卷に收錄）らによる紹介があるが、本書はインディアナ大學リリー圖書館に收藏されるボクサー夫妻關係の資料をはじめとする文獻や世界各國の關係者へのインタヴューによって構成された詳傳である。ボクサー在世中の一九九七年に着手されたが、結果的には二十世紀の巨人學者への大きな供物となった。

著者オルデン氏はワシントン大學教授。主著 *The Making of an Enterprise: The Society of Jesus in Portugal, Its Empire, and Beyond, 1540-1750* (Stanford U.P 1996) は、新舊兩大陸にまたがるイエズス會の活動を總體的に檢討し、とくにその經濟的基盤を明らかにした雄編である。その研究のスケールの大きさから見ても、ボクサー傳の作者にふさわしい。また、協力者の一人、ジム・クミンズ氏は典禮論爭に火をつけた來華ドミニコ會士ナバレッテの研究で知られ、ボクサーとは半世紀にわたる交流を持つ。榎氏が紹介したボクサーの著作目錄（George West, *A List of the Writings of Charles Ralph Boxer Published between 1926 and 1984*, Tamesis Books Ltd.）に彼が寄せた小傳が、本書登場までは教授に關する基本文獻だった。もう一人の協力者、マイケル・クーパー氏は邦譯もされた通辭ロドリゲスの傳記（原書房、一九九一。ただし全譯ではない）の著者である教會史家。最強のトライアングルによる仕事と言えるだろう。

第一部「形成期」

ボクサーは家業である軍人の道を選擇したが、視力が弱いために海軍を斷念せざるを得なかった。二十歳の時にリンカンシャー連隊に配屬されたが、軍務の傍らで歷史への關心を育んでいた。少年時代、祖母の根付コレクション（薩英戰爭に參加した祖父が將來したものと推測される）に魅せられて極東の島國への興味を喚起され、長崎版畫を收集しはじめたことが西洋で日本に最先着したポルトガルへの興味の呼び水となった、と著者は述べる。

彼は軍校時代にポルトガル語そしてオランダ語の勉強を開始していた。海軍への憧れが海事史への關心に形を變えたのである。關連書をマグス兄弟商會から購入し、ハックルート協會やロンドン日本協會のメンバーとなるなど、アマチュア學徒としてのスタートを切ると、一九二五年にポルトガル、二七年にオランダをそれぞれ初訪問し、以後リスボンの國家圖書館やハーグの國家文書館をしばしば訪れ精力的な資料收集を行った。また、イエズス會關係文書があるローマには行かなかったが、『ザヴィエル傳』の著者ゲオルグ・シュールハンマー師と二七年から文通を開始し、以後資料提供も受けている。幸田成友が「一青年紳士と言はんより寧ろ一大學生の風采をして」いた少壯學徒とハーグで出會ったのもこの頃であった。

二六年にポルトガルの雜誌に發表した處女作はマカオのポルトガル人がオランダ人を擊退した事件（一六二二）を扱ったもので、次作の「マードレ・デ・デウス號」事件とともに好んで再々取り上げるテーマとなった。

その一方で、彼の學問の特徵である譯注の仕事も始まっていた。長崎で爆沈したペ

ッソア同様、ホルムズ陥落（一六二二）という悲劇を味わった司令官ルイ・フレーレ・デ・アンドラーデ、オランダ海軍の英雄トロンプ提督の記錄を取り上げたところに、彼の志向を見て取れる。とくに前者は稀覯書だったが、彼自身の藏本が譯注の底本とされた。三七年に所藏カタログ（*Bibliotheca Boxerina*）を公にし、幸田はじめ研究者たちを嘆息せしめた恐るべきコレクターの一端がすでに表れている。また、日本通であったピゴットの勸めで、ロンドン大學東洋學校（當時の英國で唯一日本語教育を提供していた機關）で日本語を學び始めた。

三〇年、ピゴットの推擧で日本に言語將校として赴任する。この時、岡本良知・岩生成一や、大使館に勤務していたジョージ・サンソム（『西歐世界と日本』の著者）と知り合うが、最大の知己はオランダ公使パブストであった。兩親をすでに失っていた青年を公使はわが子のように可愛がり、日本國内のみならず、臺灣旅行にも伴った。すでに鄭成功のゼーランディア城奪取の論文を書いていたボクサーが現地を踏査したことは言うまでもない。三三年の歸國途次にパブストと樂しんだ東南アジア周遊は、日本からインドに至る幅廣い行徑を持ったフランソワ・カロンの足跡を追う旅でもあった。二年後に出版された『日本大王國志』注解に、その經驗が生かされている。

第二部「香港での歳月」

三七年、彼は再び東方にやってくる。香港での彼の任務は司令官の日本語通譯と、極東の情報收集であった。後者の仕事は研究の取材旅行にもなっていた。マカオの長官と接觸して日本情報を集める一方で、鄕土史家のジャック・ブラガと親交を深めた。四〇年十月には、重慶に飛んで蔣介石に會見し、短波ラジオによる情報收集網の強化を提言している。彼は三九年に結婚していたが、香港にいた西洋人女性でも際立つ存在だったノンフィクション作家エミリー・ハーンと知り合い、戀におちる。彼女は『宋姉妹』（一九四一）の成功で注目を浴び、さらに、『中國と私』（一九四四）は通算七十萬部を賣った。ボクサーの名前は人氣作家の戀人としてまず世間に認知されたのである。

眞珠灣攻擊と同じ日に、日本軍の香港侵入が始まった。ボクサーは戰鬪中に左肩を擊ち拔かれて病院に收容され、翌年の末には九龍のキャンプに移された。各キャンプに收容された捕虜たちは監視の目をかいくぐって逃亡を試みた。それを支援し、情報收集を行う中英連絡の祕密組織ＢＡＡＧの活動に關與したかどで、彼は香港島南端のスタンレー監獄に送られ、さらに廣東に收監されて終戰を迎えた。『アジア歷史事典』（平凡社）のボクサーの項目が「臺灣に送られた」とするのは誤りである。

ボクサー自身は捕虜生活について、軍人らしい緘默さで多くを語っていない。したがってこの第二部の主題は、ボクサー個人よりもむしろ、西洋人捕虜の待遇、彼らにとって情報が持った意味（とくにラジオの役割が強調される）、中國とかかわった西洋人女性たちである。卷末の參考文獻を一瞥する限り、捕虜に關する研究が近年盛んになっているようだが、著者はこれらを踏まえつつ獨自の調査を行い、熱のこもった敍述となっている。本書の讀みどころは、じつはここにあるのかも知れない。

第三部「キングズ・カレッジ時代」

戰爭が終わると彼はまず戀人の待つアメリカに向かい再婚、極東委員會を率いるサ

ンソムに隨行して翌年日本に戻ってくる。この時、神田一誠堂で舊知の幸田らと再會した彼の念頭にあったのは、沒收されたコレクションの行方であった。帝國圖書館に搬送されていた事が分かり、一部は失われていたものの、持ち主の處に戻ってきた（松本剛『略奪した文化　戰爭と圖書』もこの話に言及している）。

四七年、歸國した彼は軍務を離れ、ロンドン大學のキングズ・カレッジのポルトガル語學・文學講座に招かれる。學位を持たない彼に白羽の矢が立ったのはむろんその實力の然らしむるところだったが、英國のポルトガル學にこれといった人材がいなかったことも一因だったであろう。五一年にいったん東洋・アフリカ學校（SOAS）に移るが、「中國語が堪能でない」などの理由を口實にして、五三年原職に復歸した。以後、ブラジル・インド・アフリカとポルトガル帝國の版圖を飛び回って資料を收集し、講義・講演を行い、それらが次々論著となって公刊されていった（四七から六九年にかけて一四六點）。著者による代表作についての學問的價値や反響の吟味は參考になるが、紙幅の關係上ここでは觸れない。ただ、藏書の傾向の變化等々を分析して、ボクサーの關心が海事史から植民社會史・布教史へと移行していったとする指摘にのみ言及しておく。

六三年に刊行された *Race Relations in the Portuguese Empire, 1415-1825* には、特に一章が割かれている。この本は、ある意味では彼の著作の中でもっとも反響を呼んだ、というより物議を醸した書物である。ポルトガル人の植民地支配には他の列強に見られたような人種差別が存在しなかったという神話を否定した內容が、黃昏の植民帝國の護持に汲々としていたサラザール政權の神經に障ったのである。政府の意思を代辯してボクサーを激烈に批判したのが、トメ・ピレス『東方案內記』の紹介者アルマンド・コルテザンである。彼は亡命時代にボクサーの支援を受け、それがパリでの草稿發見につながったのだが、長年の友誼がいまや敵對へと轉じた。二人の間にあって、學者たちがボクサーの問題作にどう對應したかが描出されていて、興味深い。

第四部「世界巡回の日々」

ボクサー夫婦は共稼ぎだったが、地所の維持や稅金のために經濟的窮境にあった。事態を打開すべくボクサーは藏書の賣却を考える。それと研究を兩立させる爲には讓渡の後も本を使えればよい。その條件を滿たしたのがインディアナ大學リリー圖書館であった。六七年に彼はキングズ・カレッジを退いて妻の母國に渡り、インディアナの客員教授となった。さらにハーバードに轉ずるチャンスもあったが、大學當局はスペイン帝國史の權威ジョン・パリーを選んだ。判斷材料の一つは學位の問題であった。それに代わって手を差し伸べたのがイェールで、定年の六八歲までの三年間の雇用を提示し、ボクサーはヨーロッパ海外擴張史講座の教授として着任した。大學紛爭に卷き込まれはしたが大過なく七二年に定年を迎えた後、再びブルーミントンに戻って教鞭を取った。

彼がようやくイギリスに戻ったのは七九年のことである。その間そして以後九〇年代に入るまで、世界各地を相變わらず精力的に驅け回る彼の名聲は高まる一方だったが、著者は八〇年代以後の仕事はそれまでの燒き直しに過ぎないと附け加えることも忘れていない。本書の卷末にはウエスト目錄の補遺が附せられているが、實際には榎

による目錄紹介でほぼ事足りる（不完全ではあるが）ということである。晩年の彼に與えられた數多くの名譽のうちのクライマックスは、英國學士院に列せられたことよりも、九七年に古巢のキングズ・カレッジによって、植民期ブラジル研究にまで驥足を伸ばした彼にふさわしいポルトガル・ブラジル史講座が特設されたことかも知れない。

本書の卷末には、目錄補遺を含めて七つの附錄があるが、なかでも興味深いのが「著者と出版社」「放棄された計畫」である。前者はボクサーの名聲にもかかわらず本の賣れ行きはいまひとつで、出版社が再版に二の足を踏んだことを多少皮肉めかして述べている。なかでも七一年にボクサーが *The Portuguese Seaborne Empire* のペーパーバック化を希望した時、出版社が「キャンパスで賣れるヨーロッパ史の本はインテレクチュアル・ヒストリーか批評つきの歴史のいずれかである」と答えているのが印象的である（本書はのちに『オランダ海上帝國』とともにペーパーバック化された）。

「やりのこしの仕事」のリストの中で、筆者が個人的に惜しいと思うのは、ブラジルで布教したポルトガル人イエズス會士アントニオ・ヴィエイラの傳記である。この人物はポルトガル帝國史のみならず十七世紀のヨーロッパ史ひいては世界史を考える上でのキー・パースンの一人だからである。ボクサーが斷念した理由は神學の素養に缺けるからということのようだが、逆にそちらに力點を置いたトマス・コーエンの近作（*The Fire of Tongues*, Stanford U.P. 1998）はヴィエイラという存在の持つ世界史的意義を捉えきれていない。この點でボクサーの視野の遼闊が求められるのである。

最後に妄言。ボクサーは日本と關わりが深い人物でもあったが、彼の著書の邦譯はいまのところ刊行されていない。*The Christian Century in Japan, 1549-1650* 然りである。近刊の『二〇世紀の歴史家たち世界編』（刀水書房）に取り上げられないのはまだしも、『歴史學事典 第五卷歴史家とその作品』（弘文堂）にも項目が立っていない。漏れたのは「一國史家」でないために視野に入りにくかったということだろうが、それにしても二歳年長のブローデルとは大違いである。ボクサーの著作に對する「方法論がない、事象の掘り下げ、位置づけに缺ける」との批判（cf. Obituary by John Villiers, *JRAS* 3rd ser. 11-2）も當たってはいる。それは、プロフェッショナルとしての訓練を經ていないアマチュアの特質でもある。

しかし、筆者は方法論を延々と開陳する横文字本を見ると、「早く切り上げて本題に入ってくれ」と思ってしまうほうである。三百點以上に及ぶ論著のごく一部をかじったに過ぎないが、彼が紹介した資料・情報の中には發展の種子がたくさん眠っていることは實感できる。たとえば、小品ながら十七世紀のマカオ・マカッサル間を軸に活動したポルトガル商人を描いた著作（*Francisco Vieira de Figueiredo*, 1967）はじつに豐かな情報量を有している。彼の仕事を出發點として今後展望が開ける可能性は大いにある。最初に言及した著者の本業での著作がまさにその好例である。

Lisbon: Fundação Oriente 2001, 616pp.